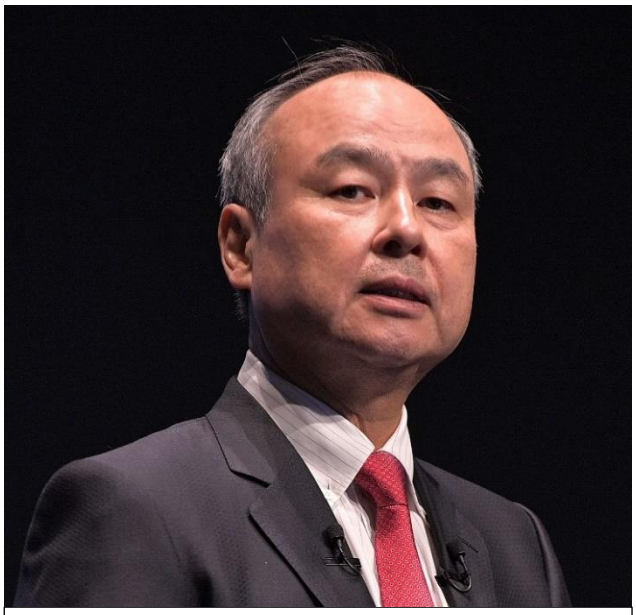
アントレプレナーの生き方（3）～孫 正義氏 その１～

日本中のほとんどの人が知っているソフトバンクグループ株式会社代表取締役の孫正義氏は、世界でも最も注目されている経営者の１人です。

孫氏は、1957 年に在日韓国人 3 世として佐賀県鳥栖市の JR 鳥栖駅近くの無番地で生まれました。生家は国鉄の土地を不法占拠していたため、住所もない場所でした。家畜の豚とそのエサの臭いが漂うバラック小屋で育った孫氏は、高校入学後「実業家になる」と一念発起します。福岡県の高校に進学後、語学研修で渡米。そのときの体験に刺激を受け、高校を中退してアメリカに渡り、最終的にアメリカの大学の中でも屈指の名門として知られるカリフォルニア大学バークレー校の経済学部に編入しました。



孫正義氏
【提供　ソフトバンクグループ株式会社】

孫氏の「実業家として起業する」という決意は固く、夢の実現のため、日々の猛勉強はもちろん、さらに仕送りを断って「毎日発明」というノルマを自らに課していました。懸命に努力を重ねる中、孫氏に一つの画期的なアイディアが思い浮かびます。それは音声機能付き電子翻訳機でした。具体的には、今のパソコンのキーボードのような本体に例えば「こんにちは」と打つと、「Hello」という文字が小さな液晶画面に出るだけでなく、「ハロー」という音声まで聞こえるという発明品です。バークレー校宇宙科学研究所モーザー博士たちの協力を得ることで、孫氏はこのアイディアを形にします。

試作品ができると、孫氏はさっそく日本の電機メーカーに手紙を送りました。10 社ほどから返事が来たため、夏休みを利用して日本に一時帰国した孫氏は、意気揚々とメーカーを回り始めました。しかし希望に胸を膨らませた学生発明家が思っていたよりも、現実の壁は厚く、高いものでした。孫氏の意気込みもむなしく、大手 9 社から立て続けに断りを受けてしまうのです。最後に残った 10 社目は、孫氏が本命としていたシャープでした。孫氏は最後の望みをかけて、奈良県天理市のシャープ中央研究所を訪問します。そこで孫氏を待っていたのは、電機産業界では誰もが知っている超大物の佐々木正氏でした。

孫氏が発明した音声機能付き電子翻訳機
【提供　ソフトバンクグループ株式会社】

佐々木氏といえば、電子立国日本を誕生させた立役者の一人であり、超小型電卓の開発で世界に名を轟かせたエンジニアです。現在誰もが当たり前に使っている電卓も、開発当初は自動車よりも高価なハイテク機器でした。しかし、佐々木氏が最先端の半導体と液晶の技術を取り入れたことで、エレクトロニクス業界全体を巻き込んだ技術革新と猛烈なコストダウンの波が生み出され、20 キロ以上もあった巨大な装置がポケットに納まる形状にまで進化したのです。

そんな佐々木氏に対して、孫氏は、自身の発明品について熱心に説明をして、商品化を訴えかけました。佐々木氏は孫氏の話を遮ることなく、最後まで聞いてくれました。礼儀正しく、目を輝かせながら堂々とプレゼンをするこの青年に、佐々木氏は並々ならぬビジョンと人物としての魅力を感じたといいます。佐々木氏は、「英語が成功したら、国連で使用する 8 カ国語の翻訳にも挑戦しなさい」と孫氏に助言を与えると、最終的に 1 億円もの契約金を研究費として提供してくれたのです。これには孫氏の将来性を見込んだ評価もありましたが、カートリッジ交換だけで他言語に対応させるという孫氏のアイディア自体が、佐々木氏には、正にソフトウェアで勝負するこれからの時代の発想に思えたのです。孫氏のアイディアは段階を追ってシャープの商品へと昇華していき、電卓機で培われた技術は、最

終的には、シャープの大ヒット商品となる電子手帳のザウルスへと進化していくのでした。

アメリカに戻った孫氏は、佐々木氏から得た契約金を手元に、学生ベンチャーをはじめます。日本で大ブームを起こしていたインベーダーゲーム機をアメリカに輸入することを思いつき、これが当たって大金を手にすることができました。

この成功に満足することなく、大学を卒業した孫氏は資金を携えて日本に帰国します。1981 年、福岡県福岡市の小さな町で創業。孫氏の下で働く社員はたった2人のアルバイトでした。孫氏は事業開始日にみかん箱の上に立つと、初めて雇った 2 人に向かって「いつか売上高を 1 兆(丁)、2 兆(丁)と豆腐屋のように数えられる会社にしてみせる」と壮大な夢を語り、強い決意を示しました。しかし 2 人は途方もない話に呆れ果てたのか、繰り返し聞かされて嫌になったのか、それから一週間も経たない間に辞めてしまったといいます。孫氏は 1,000 万円あった資本金のうち 800 万円を家電・エレクトロニクスの展示会への出展、残りの 200 万円を使ってカタログ代わりの雑誌を作ります。創業早々、一瞬の怯みもなく大勝負に出たことで、資本金はゼロになりました。ここまでが、孫氏の事業家人生の始まりです。

創業直後に出展した展示会の様子
【提供　ソフトバンクグループ株式会社】

しかし、それからわずか一年にして、孫氏は自らパソコン専門誌を創刊すると、ソフトウェア流通の貴重なルートである雑誌広告と自社とを自力でつなぐことに成功しました。ソフトウェア流通と出版という両輪により、創業から実質 1 年目にあたる 1982 年には売上高が 20 億円、翌 1983 年には 45 億円になっていました。

勢いに乗る孫氏でしたが、好事魔多し、会社もいよいよこれからという時に、健康診断で慢性肝炎と診断され、即入院を余儀なくされます。そしてなんと、余命 5 年の宣告を受けてしまったのです。孫氏は最初に入院した時、ボロボロと泣き崩れたそうです。会社はまだ始めたばかり、私生活でも子どもが生まれて正にこれからというのに、長期の入院をしなければならなくなりました。自分にはあふれるばかりの情熱とエネルギーがある。事業もこのまま続けていけさえすれば、いずれそれなりの大きな成功ができるという手応えもある。しかし医師からあと 5 年ほどの命だと宣告され、とんでもなく落ち込んだといいます。

そんな孫氏の気持ちを変えたのは、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』だったそうです。高校を中退してアメリカに行く前にこの本を読み、渡米中も何度も読み直し、帰国して事業を立ち上げ、「情報革命」に自らの生涯を捧げると決めた時にも手に取ったこの本を病室で読み返してみると、あることに気付きます。「竜馬だって 33 歳で死んだ。だけど最後の 5 年ぐらいの時間で、彼はその生涯で最も大きな仕事をしたではないか」と。だから余命 5 年というのは確かに短いけれど、もしかしたら、その 5 年の間で自分もそれなりのことがやれるかもしれない。あるいは、その 5 年間の間に、肝炎を治す方法も見つかるかもしれない。孫氏はそう考えることができるようになったといいます。それからの孫氏は「一生の間でこんなにたっぷり時間がもらえるのは最初で最後だろう」と考えを前向きに改め、全部で 3,000 冊以上にも及ぶ本を読んだのです。孫氏は結局 3 年半という長期入院を余儀なくされましたが、当時最先端医療だった「ステロイド離脱療法」により、奇跡的に一命をとりとめたのでした。

このように孫氏は、船出早々にして命に関わる大病を患ったにも関わらず、足を止めることなく挑戦を続けました。1986 年、28 歳 の時には社長職に復帰。以降、事業を拡大し、今や時価総額 10 兆円超のグローバル企業のトップとして、孫氏はさらに躍進を続けているのです。